今月の谷口雅春先生のお言葉

祖先に愛の心を起こすことで幸福が訪れる

生きている世界(現世)も、霊界も、心の働き(念波)によって良くなる

われわれの祖先も肉体を滅しても霊体の波はやはり存在しておりますので、その霊体の波たるや、その人の悟りの程度にしたがって千差万別の状態を現わしているのであります。それは現世においてもこの肉体という波動的存在がその人の悟りの程度にしたがっていろいろの波を現わして、健康であったり病気を顕わしたりしているのと同じことであります。（中略）

ですから、われわれが霊界に行きましても、この世で生活が下手な人は霊界でも生活が下手である。霊界で病気している霊魂もあれば、悩んでいる霊魂もある。それはちょうど、下手な画家であれば板の上に描いても布カンバスに描いても依然として下手であるというのと同じようなわけであります。ですからわれわれが自身または他の霊界における生活状態というものを良くしようと思うと、やはりどんなカンバス――現世とか来世とかいうカンバスがどんなに変わっても――どんな画布の上に描いてもいい絵が描けるようにしておかなくちゃならない。われわれは「現世」とか「来世」とかいうカ

ンバスに何で絵を描くかというと、念波で絵を描くのであります。念波という絵具をもって絵を描くのでありますから、その念波を善くし、またよくしてあげることが必要であるのであります。

（『生命の實相』頭注版第28巻69～71頁）

愛の心を起こすことは、霊界の祖先の喜びとなる

最もよい念波は何であるかと申しますと、悟りの念波、真理の念波なのであります。この真理の念波を人に与えるということ、これが仏教でいう法施というものでありまして、最も尊い施しであります。われわれは人に物を施すのは、物施といって物を施すのと、それから法施といって悟りの念波を施すのとがありますが、真理の念波を施すということが本当の最も根本的な供養になるのであります。

むろん、われわれは霊界へ行きましても、しばらくの間はこの地上における薫習（編註：習慣）が脱けないのでありまして、地上において御飯を食べておったような霊魂たちは、霊界へ行っても「御飯を食べたいな」というふうな感じがするのであります。そういう霊魂たちに対して食物をお供えしてあげるということは必要であります。「食物をお供えしても、お下りを見ると何も食っておらん、何も食っておらんからあんなことはただ形式的である」とこうお考えになる人もあります。けれども本当はそうじゃない。霊魂は何を食べるかというとわれわれがこれをお供え申したいという「念波」を食べるのであります。それでリンゴならリンゴをわれわれが持って行って「リンゴをお供え致します」と、本当にその念を切実に念ずると、われわれの心にリンゴというものが念によって描かれ、そうして念に描かれたリンゴと、あの人にあげたいというすなわち念送の原動力となる念とが結合する。すなわちリンゴを祖先の霊に送ろうという念波の放送により、供える人の念にて造られたリンゴというものが霊魂の世界へ念波の放送に乗って行くという

ことになるのであります。すると霊界には念によって仮作せられたリンゴが出来上がる、そうすると「あれはわたしに供えて下さったのだからいただこう」という気が起こると、すっと自分の口へ入ってしまって、そうして「おいしい、ああ満腹した」という気持が起こるのであります。その状態は『無量寿経』に書かれている極楽浄土の状態のようなものであります。霊界は念波で作られた世界であって、われわれは供養の念を供えて、供養の念を食べていただくということになるのであります。むろんもっと向上した霊魂――肉体は無い、何も食べなくてもわれわれは神の生命によって生かされているのであるという自覚を得た霊魂たちは決して何も食べたいとは思わないのでありますけれども、しかし、自分に対する愛念をもって供えて下さったという愛の念はやはり喜びとなり、その人を生長させるということになるのであります。霊界は念の世界であって霊魂たちというものは何を食物として生きているかというと、念を食物として生きているのです。善念は最も霊魂を生長せしめる滋養物となるし、悪念は霊魂を低下せしむる害物となるわけであります。

（『生命の實相』頭注版第28巻71～72頁）

祖先の守護によって私たちの運命が良くなる

われわれは祖先というものがあって今ここに生きる機縁を与えられているのでありますから、その祖先に対してわれわれが供養する、お経をよんで真理の念波を供養する、実相のサトリを供養するということは実に大切な子孫の務めであります。この子孫の務めを行なうことそのことが善事であって、その結果自然とわれわれに幸福が恵まれてくるということは、これは副作用とでもいいますか、随伴的な功徳であって、その功徳そのものを目指すのではないのであります。しかし実際上祖先に対してよく真理を施しておられる人々は、祖先の守護も多く、また自分の善念の具象化として不幸というものがないのであります。

（『生命の實相』頭注版第28巻74頁）